

安全への提言

|||||



「安全第一」 “Safety First” 「安全専一」

あら 井 みつる 充†

重大事故を起こした直後の工場や会社のエントランスに虚しく掲げられ続ける「安全第一」の看板を見ると、「安全第一」は、形骸化した安全思想の象徴に思えます。このことは、以前にもこの安全への提言に書かせていただきました。

「安全第一」は、言うまでもなく“Safety First”の日本語訳であり、“Safety First”は、1900年代初頭、United States Steel Corp. (US Steel社)の社長であったElbert Henry Garyが、不況下に劣悪な環境下で労働災害に見舞われ苦しむ多くの労働者たちのため、人道的な見地から、社内で安全運動を立ち上げ、その際のスローガンとして使われたものとされています。

“Safety First”がGary社長のオリジナルか否かは定かではありませんが、現在のUS Steel社のホームページには、“Safety First”が、1912年に同社で作られた造語であることが明記されており、その時点でGary社長が在任されていた事実を考えれば、彼が、“Safety First”をスローガンとした安全運動の中心人物の一人であったことは間違いないと思われます。そしてこの安全運動は、US Steel社のみならず、全国的に広がり、National Safety Council (米国国家安全評議会)の設立につながったと言われています。

更に、US Steel社のホームページには、「安全」が同社の中核的な価値と位置づけられていること、職場における安全を保証することが、生産性、品質、信頼性、および財務業績を向上させること、そして、“Safety First”の考え方が、ビジネスを行う上で必要不可欠なツールであり技術であること、が謳われています。

我が国では、同じく1900年代の初頭、米国に追随する形で安全運動が始められ、当時、米国内で盛んに使われるようになったスローガンである“Safety First”を「安全第一」という日本語にして、同様に安全運動の標語として用いたのが始まりのようです。「安全第一」という日本語訳は、当時通信次官であった内田嘉吉によるものとされており、内田は、安全運

動の啓蒙書として「安全第一」を出版した後、安全第一協会を設立にも尽力しています。

この時代の安全運動は、まさに産業安全という考え方がほぼ皆無の状態からの安全思想の導入となったこともあって、米国においても、我が国においても、大きな成果をもたらしていたと思われます。しかしながら、当時に比べ、安全に対する意識も考え方も大きく変化してきている現在に100年変わらずのスローガンを使うところのセンスの無さ、を前回指摘させていただきました。

今回は、改めて「安全第一」の意味を考えてみました。「第一」の解釈はなかなかデリケートです。「最優先」なのか、「優先」なのか、はたまた、単に「一番目」なのか。それぞれニュアンスは大きく異なります。また、この言葉ができた当時の「安全」が「許容できないリスク無いこと」という定義ではなく、おそらく「絶対安全」をイメージしたものであることを考えると、「安全第一」が目指すものが何なのかはいまいちピンときません。その中で、最近関連する二つのフレーズを見つけたので紹介したいと思います。

ひとつは、“Think Safety First”です。これは、インターネット上で、“Safety First”の看板の画像検索から見つけたものです。“Think”が入るだけで、“Safety First”の意味合いが明確になる印象を受けました。

もう一つは、「安全専一」です。実は、「安全専一」もまた“Safety First”の日本語訳であり、訳者は足尾銅山(古河鉱業足尾鉱業所)においてわが国初の安全運動を始めたと言われる小田川全之助です。上記、内田嘉吉より先んじて訳されていましたが、足尾銅山内のみで使われていたため、全国的な広がりが無かったようです。「専一」を辞書で調べると、「他の事を考えずに、ただ一つの事柄に心を注ぐこと」となっており、ニュアンス的には、「安全第一」より明確であると思われれます。

100年間にわたり、いつでもどこでも「安全第一」の金太郎飴、少し残念な気がするの、私だけでしょうか？

† 東京大学 環境安全研究センター 大学院工学系研究科：
〒113-0033 東京都文京区本郷7-3-1